

《談話室》

「三国志」の世界

赤井益久

(三省堂国語教科書編集委員)

いからだ。

しかし中国は、正史以外にも「稗史」「野史」といった歴史を補完する記録の宝庫でもある。これはいわゆる王朝を中心とする歴史的記録ではなく、民間に伝承する逸事であるとか、口承で伝わった奇事であるとか、その由来は怪しいものが多いのだが、中国ではこれを一概に軽視することをしなかった。

それはどんな記録や伝承でも、きつと何らかの役に立つはずであるという信念と、正史に漏れた真実もあるという広い意味での歴史性を尊重する民族的な嗜好に帰因する。文学史的には、こういった考えは小説を生み出す背景ともなっていた。

歴史好きにもっとも好まれたのが『三国志』である。いまでもなく演義として語り伝えられた物語としての興味もあるのだが、この時代のもつ混沌としたエネルギー、多くの人物が入り乱れる雑多な興奮、これらを呑み込んで流

れる歴史の潮流、いずれも読者を飽きさせない。また、この時代の特色として、人物を日常生活の断片で切り取って評する方法が流行し、歴史には認めることのできない人物像のいきいきした場面を伝えている。

二十四もある面倒な正史を簡単にひもときたいという欲求は古来あり、通史的に概観する史書は、歴史評論を含め数多い。『十八史略』はその代表と言つていいだろう。三国志の物語を歴史的な背景として『世説新語』はその人物像の真実を短い叙述の中に鋭くとらえている。

「左右敢へて近づく者莫し」を読めば、だれもが容易に曹操ならばやりかねない、という思いを持つ。また、「当に刮目して相待つべし」を読めば、魯粛とのやりとりには孫権配下の武将であった呂蒙の面目躍如たるところがある。わずかな言動、瞬時の会話のなかに、その人の持つ個性の輝きが人の意表をついて出てくる。

「乱世の姦雄」や「三顧の礼」(「此の人就きて見るべし」)、「赤壁の戦い」(「進んで赤壁に遇ふ」)は、いずれも歴史的な事跡を伝えながら、なお一編の小説を読む心地を抱くのは、歴史を紡ぎ出しているのは他ならない血肉の通った人間であるということ、我々に教えてくれるからだ。

あかい ますひさ 國學院大學教授。